

出題分析			
試験時間 120 分	配点 200 点	大問数 1 題	
分量 (昨年比較) [減少]	同程度	増加]	難易度変化 (昨年比較) [易化 [同程度] 難化]
<p><b>【概評】</b></p> <p>今年度は、近代科学の方法論について説明した文章が課題文として提示され、その方法論の特徴を理解したうえで、問題解決の方法を見つけるための方法、ならびにその実現のための具体的な取り組み・仕組みの提案を求める出題であった。具体的な問題・解決策を考えるだけでなく、より根本的な、そもそもの発想のきっかけを考えるという点が特徴的である。これは昨年度の「問題の出題意図や求められる能力を見極める」という、根本の分析に近いものがあるだろう。近年と比較しても資料の分量が減少し、生成 AI の文章が出題された点でやや変則的であるものの、全体的な傾向は変わらず、問題発見から解決という流れは未だ健在である。難易度は、全体的な分量は減少したものの、変則的な出題などを踏まえて総合的に見ると昨年度と同程度と言える。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
一	<p>問1 (1) 課題文の要約文にタイトルをつけたうえで、(2) 3つの要約文のうち、課題文の要約として適切なものを選び、その理由を述べる (300字以内)。</p> <p>問2 (1) 問題解決の糸口 (仮説) を見出し実践するためには、どのような取り組みや仕組みが必要か、自分の考え (400字以内) を述べたうえで、(2) その考えをどのように実現するのか、特定のテーマを取り上げて具体的に述べる (字数・イラスト等の制限なし)。</p>	<p>課題文は近代科学の手法である「仮説演繹法」について説明した文章であり、この課題文をもとにそれぞれの設問が展開されている。</p> <p>問1は生成AIを用いて作成された課題文の要約文が3つ提示されており、それぞれ要約のポイントが異なっている。例年と比較しても変則的な出題のように見えるかもしれないが、課題文の内容読解・要約が求められているという点は変わらない。「課題文はどのような構成なのか」「それぞれの要約文はポイントを過不足なく記述しているか」を適切に読み取って説明することが求められた設問と言えるだろう。</p> <p>問2は設問文が少々ややこしいが、問われていることは「問題解決の方法を見つけるための提案」「それを実現するための方法の具体案」の2つである。「仮説演繹法」のステップに則りつつ、「発想のための方法」「分析のための分析」などを考える問題だったと言えるだろう。なお、(1)で解答した内容がそのまま(2)に繋がってくるので答案の構成には注意が必要である。</p>	標準

### 合格のための学習法

環境情報学部の小論文問題は様々な出題形式がとられるが、SFC の理念である問題発見・問題解決の能力を試そうとしているところは概ね通底している。それゆえ対策としては、まず、国内外にどのような未解決の問題が存在しているか、またそれに対して研究者や組織はどのように対処しているのかといった最先端の事項について積極的に知ろうとすることが大切である。そのためには、SFC の web サイトやパンフレットなどを見て、SFC の研究者や学生が実際にどのような問題に取り組んでいるのかを知り、さらに自分が SFC でどのような問題に取り組みたいかを考えてみるといいだろう。今年度の問題を踏まえると、「どのように取り組むか」「取り組みには何が必要か」など、取り組むべき事柄を分析して具体化していくと良い。

2021・2022 年度は読解資料がほとんどない出題だったが、2023・2024 年度は従来通り複数の資料を読んでその内容をまとめたり、共通点を抽出する問題が出題された。複数資料の読解という点では総合政策学部の問題も同様なので、読解力や記述力を養うためにも積極的に環境情報学部・総合政策学部の過去問演習に取り組もう。なお、環境情報学部では数学的な思考力や発想力が試される問題が出題される場合があるため、基礎的な数学の勉強も欠かせない。また、2018 年度は物語を創作する問題が出題されており、年度によっては図や絵が必須となる年もあるため、普段から様々な表現方法に触れておこう。